

漢語国家の比較法史学とは、従来東洋法史として行われてきた学問的営為と概ね範疇が重なるが、在外研究期間中は、漢語国家とは何かという理論的探究と、漢語国家において量産された行政文書を如何に効率よく史料化していくべきかという史料学的研究とを並行的に行った。以下この二点に分けて研究の概要をまとめていく。

東洋法史から漢語国家の比較法史へ

東洋法史のすそ野は、すでに故島田正郎博士の提唱された「北方ユーラシア法系研究」により拡張され、「中国」という狭い枠組みから解放された感があるが、北ユーラシアに発祥した所謂「征服王朝」も、その政治と経済の中心は最終的に現代の中国東部に置かれ、政治や法律の制度も外見上は多く「中国」的な形を取り続けた。それ故に、北方の遊牧もしくは狩猟民族の建てた国家に重きを置く「北方ユーラシア法系研究」も、漢語史料を中心とした研究手法が可能となるのみならず、むしろそうした漢語史料が形作る「中国的」外見の束縛から容易に逃れることが出来なかった。したがって、この「中国的」を根本から考え直さない限り、東洋法史のさらなる発展も困難と感じられる。

「中国的」な国家の歴史を「中国史」もしくは「東洋史」の枠組みでとらえる限り、文書行政とも言われる特異な統治システムが早期に発達しつつも、それによって出現した皇帝政治が恰も二千年以上本質的に変容せずに停滞していたように見えてしまう。大家もうっかり「(中国)法の構造自体が比較的単純であって発展性に乏しい」(滋賀秀三 2003)と漏らしてしまう所以である。しかし、その実態は、時と場所によって大きく異なる。例えば、華北地方は、後漢以降漢人の大量江南移民が始まってからは、もはや非漢民族の軍事力に頼らずに統治することが不可能となった。征服王朝を待つまでもなく、「中国的」文化の粋とも考えられる唐や宋といった帝国も、前者は北魏の系譜を引く鮮卑人の軍閥の中から生まれ、後者は創始者の漢人の趙匡胤が佐陀族軍団によって皇帝に推挙されたものである。千数百年にわたり、幾つかの非漢人の民族集団によって国家の運命が左右される以上、それらの歴史の立役者を、「中国文化」に同化して抹消される「素朴民族」「夷狄」や「少数民族」等と片付けることは出来なくなる。むしろ全てを同化してしまう「中国」という近代的な枠組みに問題があると考えられる。

実は、漢語国家に対する他称の歴史にも、「中国」という統一体に覆い隠されがちな多様性がよく反映されている。近代の初期に使われていた「支那」が、古代イラン語・ソグド語を通じてサンスクリット語に伝わった「Cin」を仏典の中で漢訳した語であることは古くから知られてはいるが、それが常に「中国」のごとき統合体を指していたのではない。唐代には唐帝国を指す他称として拓跋に由来する「Taßyač」が用いられ、「支那」の方は大小に分かれ、「大支那（サンスクリット語 Sanskrit Mahācīna＝摩訶支那、アラブ語 Šīn-kālān、イラン語 Čīn-kālā）」が都の長安を、一般の「支那」が港町の広州および南シナ海を指して使われたとされる (Pelliot 1959)。そのほかに、「契丹」から来る「Catai＝Cathay」や、「南家/蠻子」に由来する「Nangia」と「Manzi/Mangi」があり、時と所によって名称も、指す

実態も、絶えず変わる。全般的に外部者にとっては、長い間「中国」のような統一的な国家は認識されなかったようである (Twitchett&Fairbank1994)。そうした多様性の中から再び統合的統一を見出したのは、16 - 17 世紀明と清の帝国と海洋経由で貿易をしていたポルトガル人の船乗りであり、彼らはサンスクリット語からマレー語に入った「Čīna」を借りて、貿易相手国の明帝国と清帝国を「China」と命名したのであるが、梁啓超等の清末の改革者や革命家は、それを最初は江戸後期から日本で使われていた「支那」に翻訳し、数年の試行錯誤の後「中国」に改めた。それが中華民国や中華人民共和国といった近代的な国民国家を指す通称としての「中国」の誕生である。

近代ヨーロッパの植民地主義に淵源を持つ他の国民国家史と同様に、この近代的な「中国」も、近代以前の漢語国家の多様な歴史を正確に捉えるのに不適切であるのは、言うまでもなかろう。欧米には「歴史を国民国家から救出する」(Duara1995 等) という声が叫ばれて久しいが、そうした視点に立つ研究に多く接触することを通じて、在外研究以前から構想していた「漢語国家」の歴史がより鮮明に描けるようになった。

具体的には、「漢語国家」とは、支配集団の母語の如何を問わず、漢語を以て法律制度を構築し、漢語による行政文書を通じて国家権力を行使する国家というように定義できる。

「中国語」とは異なり、「漢語」はもはや特定の国家に直結しないから、この定義は、奈良時代の日本列島に出現した律令国家や朝鮮半島の李氏朝鮮等々、時空を異にする多様な国家群を捉える包摂力を有する。

漢語国家の長い歴史は二つの転換点を軸に大きく三つの時代に区分することができる。一つ目の大転換は、漢語国家の周辺に漢語以外の言語を記述する固有の文字体系を持った国家の出現であり、時は 8 世紀である。それ以前には、漢語には歴史を記述する独占的地位があり、漢語国家一色の歴史が続いていたが、固有文字の出現によって、例えば唐蕃會盟石碑の建立 (822) に象徴されるような真の国際秩序が形成され、その中からさらに、他の言語を漢語と併用するハイブリッドな漢語国家が発展してくる。遼・金・元・清、従来征服王朝とされてきた国家は即ちそうしたハイブリッドな漢語国家と理解できる。

もう一つの転換は、1758 年のジュンガル帝国の滅亡に象徴される遊牧民帝国の消失である。漢語国家には、長い間、陸路で中央アジアと繋がる世界と、海洋を通じて東南アジアや南アジアと密接な交渉を続けてきた世界とが併存していた。「中国史」の枠組みでは、この違いは従来も「馬の中国」と「舟の中国」として描かれることがあったが、そもそもこの二つの世界が一つの「中国」に統合されるのは、大きな地政学的変動を背景とする。つまり、16 世紀以降明と清という二つの帝国は、世界的な貿易網の中心となり、中南米と日本から流入する銀によって法定通貨が駆逐されるほどの富がもたらされる。その恩恵に与るのは主として東南の沿海地方に集中して居住する漢人社会であり、長く人類歴史の牽引役を勤めていた遊牧民が股に掛けていた草原地帯は逆に発展性に乏しい内陸地に変質する。清国によるジュンガル帝国の徹底的破壊はそうした地殻変動の周着点といえよう。

ところが、この地政学的変動は、清国内部にも大きな変化をもたらした。18 世紀に一強

の観を呈した清帝国が 19 世紀に大英帝国に覇権を譲ると同時に、国内的にも、満州貴族を筆頭としていた旗人の支配力は、地方の総督等を勤める漢人社会の代表に移っていく。つまり、清国は満州族に指導されるハイブリッドな漢語国家から、漢人に支配される漢語国家に変質していく。ハイブリッドな漢語国家の歴史を否定し、新しく出現した漢人的漢語国家に相応しい外観を与えるために、「支那」や「中国」といった斬新な訳語が用いられたのである。

史料学的研究

漢語国家には、文化や社会経済的背景の大きな違いに関わらず、文書を重視していたという大きな共通点が認められる。近代論者の中には、近代化を「行政の基本的行為を文書に基づいて行う政治システムの制度・体系の確立過程」（小名康之 2012）として捉える傾向もみられるが、その基準からすれば漢語国家はすでに二千数百年前から近代に突入したことになる。それは、もちろんヨーロッパの近代化経験を安易に普遍化した時に生じる謬論に過ぎない。漢語国家の歴史を扱うには、前近代と近代を問わず、常に莫大な量の文書と格闘する覚悟が求められる。それは実に大きな史料学的問題である。どのように、それだけの文書資料を効率よく裁けるかは、漢語国家の歴史を研究するものの誰もが避けて通ることのできない問題である。

在外研究以前から簡牘（＝竹簡・木簡）に書かれた行政文書を重要な研究資料として用いてきたが、簡牘が官府の主要な書写材料である戦国時代から魏晋時代までの間だけでも、出土簡牘は 30 万枚を下らないと言われる。それは個人研究のみならず従来型の共同史料講読の扱える範囲をも遥かに超えるものである。それで、簡牘学の細分化・専門化が生じ、簡牘を総合的に研究することが困難となってきたが、この難局を打開する策としてはテキストの機械処理に大きな期待が寄せられる。

具体的には、TEI（Text Encoding Initiative）が、互換性を保ちつつ多様なテキストをエンコーディングして機械可読性を付与する技術を提供するが、その技術を簡牘学に応用する方法を探究した。それは、一つに、簡牘学固有の情報を表現するタグ体系の構築である。もう一つには、Python というプログラミング言語を用いて、タグ付け自体をも自動化する実験を行った。さらに、同一のテキストに関わる複数のエディションを自動的に TEI 形式に翻刻した上で、エディションの異同を機械的に調べるプログラムの開発も試みた。

総体的に言えば、簡牘学関連のプログラミング開発は、学術的使用に耐える電子テキストを構築し、紙媒体では容易に実現できない複数のテキスト間の校正や比較等を実現することを通じて、個人的処理能力を遥かに超える簡牘資料の総合的研究を再び可能にする道を開くことが主要な目的である。つまり、情報学を駆使して簡牘学の総合的史料学を確立し、それを通じて少なくとも簡牘が用いられた時代の漢語国家にわたりその基幹である文書行政の実態を総合的に把握する基盤を構築することがこの研究の狙いである。

在外研究の経過と今後の展望

在外研究の最も長い時間はシカゴ大学で過ごした。2023 年 9 月から 2024 年 7 月まで、自分と全く異なる教育背景を持った同大学の院生を相手に講義や共同史料講読を行い、主として漢語国家の通史的理論把握に努めた。プログラミング開発も常に並行的に行っていたが、この分野の専門家と学術的交流を持ち、AI 活用などに関する議論や助言が得られたのは、2024 年 9 月から 12 月までの間に北京大学に滞在した時である。同大学の中国語文学系が主催した古典学と AI に関わる国際シンポジウムにおいて、TEI に準拠した簡牘学情報の自動翻刻に関する研究報告を行った。シカゴと北京のほかに、ドイツのハンブルクに 2023 年 5 月から 8 月までと、2024 年 8 月と、2025 年 1 月から 3 月までの間に滞在したが、ベルリンとも日帰り往復できる利点を利用し、ベルリンとハンブルクにある国家図書館で主として文献調査を行った。日本のみならず、シカゴ大学等と比べても、デジタルコンテンツへのアクセスの容易さや、コンテンツの質量には驚くほどの差が感じられた。

今後は、漢語国家に関する研究を主として教育に活用し、「中国」や「東洋」という狭い枠組みにとらわれず、世界史の中で、漢語を法制構築に用いた国家の位置づけを日本の律令国家も含めて捉えなおして教授する予定である。また、シカゴ大学での経験を活かし、少なくとも大学院の授業は英語で行い、且つ従来日本語と中国語に限られていた執筆活動も英語圏に広げようとする。一方、情報技術による史料学の刷新は、従来から簡牘の共同史料講読を行ってきた研究仲間との共同研究に応用し、可能な限り科研プロジェクトの申請に繋げていく所存である。